

坐処考

ヨーガ行者のいる風景

金 沢 篤

はじめに

先般、南山大学のポール・スワンソン氏の講演を拝聴する機会があった⁽¹⁾。禅の世界では有名な「壁観」という用語の成り立ちを廻っての、「ダルマと《壁観》と梵漢合成語」と題するユニークでかつスリリングなお話であった。氏自身が温めてこられた大胆な仮説の提示を興味深く聴いたのである。むしろその真偽のほどは、わからない、今の段階では何とも言えない。その講演会の翌日、同僚の石井公成氏より、スワンソン氏の講演とも深く関係する、氏の旧作論文「石壁を通りぬける習禅者と壁に描かれた絵 壁観の原義について⁽²⁾」のコピーを拝受した。想像力に富んだ、極めて刺激的な論攷で、いつもながら啓発されるところが少なくなかった。また、それと前後して、ヴィヤーサ Vyāsa の『ヨーガスートラ註解』Yogasūtrabhāṣya に対する復註、『ヴィヴァラナ⁽³⁾』Yogasūtrabhāṣyavivaraṇa の研究を鋭意継続してこられた、本学大学院の加藤龍興氏の「ヨーガ哲学徒 Śaṅkara による坐法 「ヨーガと禅」参究の為の一資料」と題する論文を拝読する機会を得た。これは『禅研究所年報』第15号に掲載されるものであるから、年内には日の目を見る筈である。氏の論攷は、作者とされるシャンカラ Śaṅkara の記述する「ヨーガの坐法」と曹洞宗でよく行われる『普勸坐禅儀』の坐法を比較したもので、曹洞宗の僧籍をも持たれるインド哲学研究の学徒ならでは、意欲作である。それを通読して、筆者は『ヴィヴァラナ』に描かれる「ヨーガの坐法」中に見られる、坐法というよりは文字通りの坐処、むしろ「ヨーガ行者のいる風景」と言うべきものに一種新鮮な驚きを覚えた。

周知のように、ヨーガは今も根強く生き続けているインドの重要な文化伝統である。師の導きなしには、ヨーガの修習に関わる何事をも理解し得ないのでは、との深い危惧を覚えぬものではないが、幸いなことに、文献に即したものに限っても、ヨーガ、及びその哲学体系に関しては、既に膨大な研究成果の蓄

積もある。ただの一度も実践の伝統の流れに与したことの無い門外漢の筆者ではあるが、そうした先人の研究成果に依りつつ、筆者の前に突如かすかに姿を現した、この「ヨーガ行者のいる風景」に、もう少しだけ文献に即した形で、迫ってみたいと考えた。それが本稿の目的である。『ヴィヴァラナ』のその記述に注目し、その特異性を指摘し、さらにその特異性によって来たるところを文献的に私かに闡明しようとしたものが本稿であるが、結局は、筆者によって四方山の資料より蒐められた「坐処」に関わるサンスクリット語テキストと、訳文の羅列提示に留まるであろう。

・古典的坐処

ここで、問題の『ヴィヴァラナ』の記述(i)であるが、それは、現行『ヨーガストラ』Yogasūtra -46とその『ヨーガストラ註解』の以下の記述(o)に対する復註の一部である。

(o) uktāḥ saha siddhibhir yama-niyamāḥ / āsana-ādīni vakṣyāmaḥ / tatra sthira-sukham āsanam//46//

tad yathā padma-āsanaṃ, bhadra-āsanaṃ, vīra-āsanaṃ, svastikaṃ, daṇḍa-āsanaṃ, sopāśrayaṃ, paryaṅkaṃ, krauñca-niśadanaṃ, hasti-niśadanaṃ, uṣṭra-niśadanaṃ, sama-samsthānaṃ, sthira-sukhaṃ, yathā-sukhaṃ ca ity evam ādīni //46// (Ys -46 & Ysbh, pp.225-226)

(o) 禁戒(yama)・勸戒(niyama)が、諸々の成就[力](siddhi)と共に、述べられた。われわれは、坐法(āsana)等を、述べるであろう。そのうち、《坐法とは、堅固にして、楽なものである。》(Ys -46)

例えば、蓮華坐(padma-āsana)、吉祥坐(bhadra-āsana)、英雄坐(vīra-āsana)、卍[坐](svastika)、棒坐(daṇḍa-āsana)、要支持[坐](sopāśraya)、寝台[坐](paryaṅka)、鴨坐(krauñca-niśadana)、象坐(hasti-niśadana)、駱駝坐(uṣṭra-niśadana)、平坐(sama-samsthāna)、堅固楽[坐](sthira-sukha)及び、如楽[坐](yathā-sukha)といったもの等である。(拙訳)

この(o)を踏まえてか、『ヴィヴァラナ』作者は、「禁戒・勸戒が、諸々の成就[力]と共に、述べられた。今や、われわれは、坐法(āsana)等を、述べるであろう。そのうち、《坐法とは、堅固にして、楽なものである。》堅固にして、かつ楽なものが、坐法である。その、坐法に、住せる者には、諸々の意・肢体の、堅固性が生じる。そして、その[坐法]によったならば、苦が生

じない、ところの、その〔坐法〕を、修習すべきである。例えば、他の教学によって周知の、⁽⁵⁾蓮華坐等の、諸々の名称が、示されるのである。」“uktāḥ saha siddhibhir yama-niyamāḥ / idānīm āsana-ādīni vakṣyāmaḥ tatra sthira-sukham āsanam / sthiraṃ sukhaṃ ca[^]āsanam / yasminn āsane sthītasya mano-gātrānām upajāyate sthiraṭvam, duḥkhaṃ ca yena na bhavati tad abhyasyet / tad yathā śāstra-antara-prasiddhāni nāmāni padma-āsana-ādīni pradarśyante //” (Ysbhvi, pp.15-18) と述べた後に、以下の (i) ように続けるのである。

(i) tatra [śucau] [deva-nīlaya] -giri-guhā-nadī-pulina-ādau jvalana-salila-asamīpe jantu-vivarjite nira(ṅga)śmake [śuciḥ] samyag ācamya, parameśvaram akhila-bhuvana-eka-nāthaṃ abhivandyāṃś ca yogeśvarān ātma-gurūṃś ca praṇipatyā, caila-ajina-kuśa-uttaram [aduḥkhakaram] prāṇmukha udaṇmukho vā viṣṭaram adhiṣṭhāya, anyatamad eṣāṃ āsanaṃ nirbadhnyāt⁽⁶⁾ // (Ysbhvi, p.225, ll.19-22)

(1a) その場合、火 (jvalana) ・水 (salila) が側になく (asamīpa) 生類のいない (jantu-vivarjita) 石のない (niraśmaka) 清らかな (śuci) 神の居所 (deva-nīlaya) ・山の洞窟 (giri-guhā) ・川の中洲 (nadī-pulina) 等において、正しく嘸って (ācamya) 〔身を〕清らかに (śuci) して、全世界 (bhuvana) の唯一の守護者である、最高自在神 (parameśvara) に対して、さらに、尊敬すべき、ヨーガの王 (yogeśvara) たちと、自らの師たちに対して、平伏した後に、布 (caila) ・皮 (ajina) ・クシャ草 (kuśa) を覆い (uttara) とする、苦をもたらずことのない (aduḥkha-kara) 坐処 (viṣṭara) に、東面 (prāṇ-mukha) ないし北面して (udaṇ-mukha) 坐して (adhiṣṭhāya) 以下の諸々の〔諸坐法〕のうちの、いずれかの、坐法 (āsana) を、結ぶべきである (nirbadhnyāt) (拙訳)

(1b) (First) let him go to a pure place, such as a cave in a holy mountain or an islet in a river, but not right beside a fire or running water, a place free from insects, without pebbles. Having sipped water in the traditional way, having bowed to the Highest Lord (parameśvara) the one ruler of the whole universe, and to the holy ones and to his own selfless teacher, master of yoga, let him lay a seat. On kuśa grass he spreads an antelope skin, and on that a cloth, to prevent discomfort. In one of the mentioned places he should take his seat, facing east or north. (Leggett[1992], p.273)

(1c) Therein, in places like an abode of the gods (temple), mountain, cave, river

bank, sand bank, not close to water or fire free of insects, free of stones, sipping pure water, bowing down to the Almighty Lord, the one God of the Universe and also bowing to the great yogIs and one's gurus, sitting on a seat of cloth, on a deer skin, over a cluster of grass which dose not cause pain(discomfort), facing either the east or the north, one should fix oneself in anyone of the following .
(Rukmani[2001],i,p.367)

いかがであろうか？ 筆者の目下の関心は、『ヴィヴァラナ』のこの部分に描き出された「坐処」「ヨーガ行者のいる風景」に向けられているのである。

一瞥して明らかな通り、註釈対象の笈の(○)には、「ヨーガの実修場所」「坐処」に関する記述は一切見られないのである。それを、「他の教学では周知の坐法」を詳しく列挙紹介する過程で、現行のパタンジャリ Patañjali (& Vyāsa) のヨーガ教学においては、解説されることのないその坐処に関してまでも解説する、という体裁になっているのである。結局、坐法の名称やその内実に関しては、ヴァーチャスパティ Vācaspati の『タットヴァヴァイシャーラディー』 Tattvavaiśārādī 等の従来の定番的復註の当該箇所では論じられるものの、坐処については、一切触れられることがないのである。その意味からも、『ヴィヴァラナ』作者による、(i) は貴重なものであり、その作者問題にも有効な突破口を与えてくれるものと思われた。

そこで、問題の記述を仔細に検討してみよう。「ヨーガ実修場所」を廻る記述で筆者が特に注目するのは、下線を付した箇所、以下の諸点である。

- (イ) 坐処の立地条件：火、水が側になく、石がなく、人がなく、清らかであること
- (ロ) 坐処立地の実例：<神の居所>、<山の洞窟>、<川の中洲>
- (ハ) 坐処の条件・構成：苔をもたらずことがないこと、布・皮・クシャ草を覆いとするものであること
- (ニ) 坐処の向き・方角：東面ないし北面

筆者は、ひとまず、(1a) のように訳出してみたのだが、(1b)(1c) の英訳からも窺い知れる通り、必ずしもその解釈は容易ではないのである。残念ながら、『ヴィヴァラナ』に対する註釈は伝わらず、その解釈は、現代のわれわれに委ねられている。ということで、本稿で筆者が目指すのは、この「坐処」「ヨーガ実修場所」を廻る記述(i)に、註記を付す作業と言い換えてもよいのである。

一つの複合語として表されている、(口)の解釈が困難である。Leggett 訳(1b)は、<聖なる山の洞窟>と<川の中洲>、Rukmani 訳(1c)は、<神の居所>と<山>と<洞窟>と<川の中洲>としている。とりあえずの拙訳(1a)は、その中間を行って<神の居所>と<山の洞窟>と<川の中洲>としてみた。また、(イ)にしても、<火>はともかくも、<水>が側にないことと、<川の中洲>が矛盾することのようにも思える。中洲(pulina)が具体的にイメージ出来ないということもある。また、拙訳(1a)ではテキストを niraśmake と取って、「石がなく」としたのに対して、Leggett 訳も Rukmani 訳も、「虫なく、石なく」としている。これはどういうことだろうか? 「虫なく」とは、どういう読みから導出されるのであろうか? まさか、niraśmaka 一語で niraśmaka と nirmaśaka の両語を代用させているわけではあるまい。(二)にしても、それによって「坐処」の方角が規定されていると考えられるが、何故<東面ないし北面して>なのかが不明である。さらにまた一つの複合語として表されている(八)は、Leggett 訳だと「クシャ草の上に羚羊皮を敷き、さらにその上に布を引いて坐処を作る」。Rukmani 訳だと「クシャ草の上の、鹿皮の上の、布の坐処」というように読める。もしかしたら、他のヨーガ教学/ヨーガ実修の実情に馴染んだ者にはわけなく知れることであるのかも知れない。また、Leggett 訳(1b)では、筆者が「[身を]清らかに(śuci)して」と訳した箇所が訳されていない。Rukmani 訳(1c)は、明らかに男性単数主格の śuciḥ を、どうしたことか、pure water と誤訳している点が気になる。また、「嘍る」sip(英語)と訳される ā-cam- というサンスクリット語の動詞の担う意味が必ずしも明確ではない。

ヨーガについて語る書物は数あれど、ヨーガ実修の場所について組織的に詳細に記述したものはあまりないのではないかと、それこそが、筆者の本稿執筆の動機の一つである⁽⁷⁾。膨大な数量のインドの歴史的文献の中からそれを記した用例を拾い出す作業は、やはり困難を極めるだろう、と予想される。種々の研究文献に当たれば、それでもなにかはヒットする、資料を手にすることができさえすれば、それなりに用例は見つかるものである。そうした用例の中でも、以下の『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』Śvetāśvatara-upaniṣad -10の記述(ii)は、歴史的に見て、とりわけ重要な意義をもつものである。

(ii) same śucau śarkarā-vahni-vālukā-vivarjite śabda-jala-āśraya-ādibhiḥ / manonukūle na tu cakṣu-pīdane guhā-nivāta-āśrayena prayojayet //10// (Svup - 10:p.49)

(2a) 「平坦、清潔にして、砂礫、火気なく、喧声、水、他の隠棲所なき地において、眼に障るものなき、適意なる所において、閑静にして、風に暴されざる隠所において、瑜伽を行ずべし。」(佐保田[1979] 236頁)

(2b) 「平らで清潔な所、小石、火、砂のない所、音のない流れなどのある所、思考にとって快適でしかも目に痛みを与えない所、洞窟あるいは風のない隠れ場所で、人はヨーガ(yoga)を実践すべきである。」(湯田[2000] 487頁)

(2c) In a level clean place, free from pebbles, fire and gravel, favourable to thought by the sound of water and other features, not offensive to the eye, in a hidden retreat protected from the wind, let him perform his exercises (let him practise Yoga). (Radhakrishnan[1953],p.721)

(2d) At a level place, free from pebbles, fire and gravel, pleasant to the mind by its sounds, water and bowers, not painful to the eye, and repairing to a cave, protected from the wind, let a person apply (his mind to god). (Roer[1978],p.283)

(2e) Level and clean; free of gravel, fire, and sand; near noiseless running waters and the like; pleasing to the mind but not offensive to the eye; provided with a cave or a nook sheltered from the wind in such a spot should one engage in yogic practice. (Olivelle[1996],p.256)

(2f) In a clean level spot, free from pebbles, fire, and gravel, / By the sound of water and other propinquiries / Favorable to thought, not offensive to the eye, / In a hidden retreat protected from the wind, one should practise Yoga. (Hume[1931],p.398)

(2g) One should fix the mind (on the supreme Self while dwelling) in a shelter, such as a cave free from wind, that is even, free from pebbles, fire and sand, and free from sound and water, and that is not a public shelter, and that is pleasing to the mind but not painful to the eyes. (Gambhīrānanda[1986], p.116)

先人各氏による翻訳中、二重下線を付した“śabda-jala-āśraya-ādibhiḥ”の箇所注目したい。その解釈が、とりわけ難解のようである。有名ウパニシャッドということで、とにかく多数の翻訳が発表されているが、文法的にも可能な

“aśabda-jala-āśraya-ādibhiḥ”との読みを含めて、この部分の解釈に関しては、色々問題がある。(2a)の「喧声、水、他の隠棲所なき」と(2b)の「音のない流れなどのある」の対比、さらに、「意に適う／快適な」mano-anukūleとリンクさせたような(2c)の“favourable to thought by the sound of water and other features”や(2d)の“pleasant to the mind by its sounds, water and bowers⁽⁸⁾”等々、この場合、どれが正しいのか、にわかには決着が付けられない。

この『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の記述(ii)は、「坐処」と「清らかな(śuci)」場所を、明確に結びつけている点からしても、『ヴィヴァラナ』の(i)とかなり重なりあうように思われるが、総じて似て非なるものとの観もある。先にも述べたように、複合語で表されている部分の解釈は一通りには行かないわけで、結局先人が残した註釈や種々解釈を頼りとせざるを得ないのである。「おそらく偽作であろう⁽⁹⁾」と言われるが、やはり Śaṅkara の作とされる註釈を見てみよう。

(iii) sama iti / same nimna-unnata-rahite deśe / śucau śuddhe / śarkarā-vahni-vāluka-ādi-varjite / śarkarāḥ kṣudra-upalāḥ / vālukās tac-cūrṇam / tathā śabda-jala-āśraya-ādibhiḥ / śabdaḥ kalaha-ādi-dhvani / jalaṃ sarva-prāṇy-upabhogyam / maṇḍapa āśrayaḥ / mano-anukūle manorame caḥṣu-piḍane prativādy-abhimukhe / chāṇḍaso visarga-lopaḥ / guhā-nivāta-āśrayaṇe guhāyām ekānte nivāte samāśriya prayojayet prayuñjīta cittaṃ parama-ātmani //10// (Svupbh.p.49)

(3) {same} と。「sama (平坦な)」「すなわち」窪み (nimna)・隆起 (unnata) のない (rahita)、「場所 (deśa) に」「śuci (清らかな)」「すなわち」清浄な (śuddha)、「śarkarā-vahni-vāluka-ādi-varjita (小石・火・砂等のない)」、「śarkarā (小石)」とは、小さな (kṣudra) 石 (upalā) ということであり、「vāluka (砂)」とは、その [石の] 粉末 (cūrṇa) である。同様に、「śabda-jala-āśraya-ādibhiḥ (音声・水・場所・等)」、「śabda (音声)」とは、喧噪 (kalaha) 等の諸音 (dhvani) である。「jala (水)」とは、一切の生命体の享受対象 (upabhogyā) である。「āśraya (場所)」とは亭 (maṇḍapa) である。「mano'nukūla (意に順じてる)」とは、意楽 (manorama) のことであり、「caḥṣupīḍana (眼を圧する)」とは、敵対者に対面しているということである。ヴィサルガの落失は、韻律上のものである。「guhā-nivāta-āśrayaṇa (洞窟・風のない場所)」、洞窟 (guhā) 内の、風のない (nivāta) 秘隅 (ekānta) に、拠住して (samāśritya)、「prayojayet (ヨーガを実修す

べし)」とは、心(citta)を、最高我(parama-ātman)に、傾注すべきである(prayujīta)ということである。(拙訳)

また、『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の(ii)に類する記述は、『バガヴァッドギーター』Bhagavadgītāにも見られる。以下の(iv)がそれである。

(iv) yogī yuñjīta satatam ātmānaṃ rahasi sthitaḥ /
ekākī yata-citta-ātmā nirāśira-parigrahaḥ //10//
śucau deśe pratiṣṭhāpya sthiram āsanam ātmanaḥ /
 na[^]atyucchritaṃ na[^]atinīcaṃ caila-ajina-kuśa-uttaram //11//
 tatra[^]ekāgraṃ manaḥ kṛtvā yata-citta-indriya-kriyaḥ /
 upaviśya[^]āsane yuñjyād yogam ātma-viśuddhaye //12// (Bhg -10 ~ 12:pp.103-104)

(4a)「ヨーギン(yogin 観法の修行者)は、ただ独り寂寞の所にありて心身を統御し(yatacittātman) 欲望を去り、所有なく、常に自己(ātman)を修練すべし。」¹⁰ 「清浄の所において、自己(ātman)のために、高きに過ぎず、低きに過ぎず、布・皮・クシャ草を敷き重ねたる堅固の座を設けて、」¹¹ 「その座に坐し、「意」(manas)を一境に集中し、心(citta)と感官との活動を統御し、アートマン(自我)の清浄のために、ヨーガを修練すべし。」¹² (辻[1980] 108頁)

(4b)「ヨーギンは一人で隠棲し、心身を制御し、願望なく、所有なく、常に専心すべきである。」¹⁰ 「清浄な場所に、自己のため、高すぎず低すぎない、布と皮とクシャ草で覆った、堅固な座を設け、」¹¹ 「その座に坐り、意(思考器官)を専ら集中し、心と感官の活動を制御し、自己の清浄のためにヨーガを修めるべきである。」¹² (上村[1992] 63頁)

(4c)¹⁰. Let the disciplined man ever discipline / Himself, abiding in a secret place, / Solitary, restraining his thoughts and soul, / Free from aspirations and without possessions. / ¹¹. In a clean place establishing / A steady seat for himself, / That is neither too high nor too low, / Covered with a cloth, a skin, and kuśa-grass, / ¹². There fixing the thought-organ on a single object, / Restraining the activity of his mind and senses, / Sitting on the seat, let him practise / Discipline unto self-purification... (Edgerton[1946], p.63)

(4d)(10) Let the yogin try constantly to concentrate his mind (on the Supreme

Self) remaining in solitude and alone, self-controlled, free from desires and (longing for) possessions. / (11) He should set in a clean place his firm seat, neither too high nor too low, covered with sacred grass, a deerskin and a cloth, one over the other. / (12) There taking his place on the seat, making his mind one-pointed and controlling his thought and sense, let him practise yoga for the purification of the soul. (Radhakrishnan[1948], pp.192-195)

(4e)10.A yogī should constantly concentrate his mind by staying in a solitary place, alone, with mind and body controlled, free from expectations, (and) free from acquisition. / 11.Having firmly established in a clean place his seat, neither too high nor too low, and made of cloth, skin and kuśa-grass, placed successively one below the other; / 12.(and) sitting on that seat, he should concentrate his mind for the purification of the internal organ, making the mind one-pointed and keeping the actions of the mind and senses under control. (Gambhīrānanda[1984], pp.285-287)

この(iv)においては、先ずは、(i)(ii)と同様に、「坐処」が、とにかくも、「清らかな(śuci)場所(deśa)」と明確に結びつけられていることを確認すべきである。さらに、(ii)には見られないものの、(i)には明記される、ヨーガ実修者の側の「清らか(śuci)」さが、姿を変えて、「ヨーガの修練」が「アートマン/自我/自己の、浄化」を目的としている(viśuddhy-artham)との記述として現れている点にも注目すべきであろう。また、(i)の「布・皮・クシャ草・・・」のルーツが、この(iv)の延長線上にあることも容易に見てとれるであろう。また、この『バガヴァッドギーター』の(iv)に対しては、「おそらく確実にシャンカラの真作であると思われる⁽¹⁰⁾」註釈が存する。以下の(v)である。

(v) ata evam uttama-phala-prāptaye yogī dhyāyī yuñjīta samādadhyaṭ satataṃ sarvadā[^]ātmanam antaḥkaraṇam rahasy ekānte giri-guhā-ādau sthitaḥ sann ekāky asahāyaḥ / rahasi sthita ekākī ca[^]iti viśeṣāt samnyāsaṃ kṛtvā[^]ity arthaḥ / yata-citta-ātmā cittam antaḥkaraṇam ātmā dehaś ca saṃyatau yasya sa yata-citta-ātmā nirāśīr vīta-trṣṇo[^]aparigrahaś ca / parigraha-rahita ity arthaḥ / samnyāsitve[^]api tyakta-sarva-parigrahaḥ san yuñjīta[^]ity arthaḥ //10//
atha[^]idānīm yogaṃ yuñjata āsana-āhāra-vihāra-ādīnām yoga-sādhanatvena niyamo vaktavyaḥ / prāpta-yogasya lakṣaṇam tat-phala-ādī ca[^]ity ata ārabhyate /

tatra[^]āsanaṃ eva tāvat prathamam ucyate

śucau śuddhe vivikte svabhāvataḥ saṃskārato vā deśe sthāne pratiṣṭhāpya sthiram acalam ātmana āsanaṃ na[^]atyuccritaṃ na[^]atīva-ucchritaṃ na[^]apy atinīcaṃ tac ca caila-ajina-kuśa-uttaram cailam ajinaṃ kuśāś ca[^]uttare yasminn āsane tad āsanaṃ caila-ajina-kuśa-uttaram / pāṭha-kramād viparīto[^]atra kramaś caila-ādīnām //11//
pratiṣṭhāpya kim **tatra** tasminn āsana **upaviśya** yogaṃ **yuñjāt** / kathaṃ, sarva-
viṣayebhya upasaṃhṛtya[^]**ekāgraṃ manañ kṛtvā yata-citta-indriya-kriyaḥ** cittam
ca[^]indriyāṇi ca citta-indriyāṇi teṣāṃ kriyāḥ saṃyātā yasya sa yata-citta-indriya-
kriyaḥ / sa kim-arthe yogaṃ **yuñjād** ity āha **ātma-viśuddhaye[^]antaḥkaraṇasya**
viśuddhy-artham etat //12// (Bhgsbh,pp.294-296)

(5) これ故に、このようにして、最高の果の獲得の為に、「yogin (ヨーガ行者)」は、静慮者 (dhyāyin) は、「satatam (常に)」一切時に、「ātman (アートマン)」を、内官 (antaḥkaraṇa) を、「rahas (隠処)」に、山の洞窟 (giri-guhā) 等の、秘隅 (ekānta) に、「sthita (あって)」、ありつつ、「ekākin (一人)」で、「yuñjita (ヨーガすべきである)」、三昧すべきである (samdadyāt) 。そして、「rahasi sthita ekākī (隠処にあって、一人で)」という限定辞があるが故に、遠離 (saṃnyāsa) を為した後に、という意味である。「yata-citta-ātman (制御されたる心・我を有して)」、「citta (心)」とは、内官のことであり、そして、「ātman (我)」とは、身体 (deha) のことであり、[その心・我の両者が] 総制されている (saṃyata) 。その者が、「yata-citta-ātman (制御されたる心・我を有して)」ということである。「nirāśis (願望がない)」、渴望 (trṣṇa) が去っていて、そして、「aparigraha (摂持のない)」、摂持 (parigraha) がない、という意味である。遠離者 (saṃnyāsin) であるとしても、一切の摂持 (parigraha) を捨てて、ヨーガすべきである、という意味である。 10 「śuci (清らかな)」清浄な (śuddha) 。本来的に、または必要上、切り離された (vivikta) 、「deśa (場所)」場処 (sthāna) に、「(sthira (堅固なる)) 不動なる、自己の、「na[^]atyucchrita (高過ぎもせず)」過度に高くなく (na[^]atīva-ucchrita) 。「na[^]atīnica (低過ぎもせぬ)」、「āsana (坐処) を」「pratiṣṭhāpya (設置して)」、しかも、その [坐処] は、「caila-ajina-kuśa-uttaram (布・皮・クシャ草を覆いとする)」、布と皮とクシャ草が、覆い / 後者の上に (uttare) [ある、] その坐が、布と皮とクシャ草を覆いとするもの (caila-ajina-kuśa-uttara) で

ある。これに関しては、「布」等という列挙順 (pāṭha-krama) とは顛倒した (viparīta) 順がある。11 設置して、どうするのか? 「tatra (そこに)」、その坐 (āsana) に、「upaviśya (入坐して)」、ヨーガを「yuñjyāt (修すべきである)」。どのようにしてか? 一切の対象 (viśaya) より、撤退して (upasamhṛtya) 「ekāgraṃ manaḥ kṛtvā yata-citta-indriya-kriyaḥ (意を専注と為し、心と感官の活動を制御し)」、心 (citta) と諸感官 (indriya) が、「citta-indriya (心と感官)」であり、それらの、諸活動 (kriyā) が、総制されている (samyata) その者が、心と感官の活動を制御した者である。その者は、いかなる目的の為に、ヨーガを、修すべきである (yuñjyāt) のか? というので、述べる。「ātma-viśuddhaye (アトマンの清浄のために)」、それは、内官 (antaḥkaraṇa) の清浄 (viśuddhi) を目的としている。

12 (拙訳)

『バガヴァッドギーター』(iv) に対する Śaṅkara のこの註解 (v) によって、坐処の構成が明瞭に理解されるのである。ヨーガ行者が坐るのは、布、ないし、皮、ないし、クシャ草で出来た坐処というよりは、それらを、「敷き重ねた坐処」である。また、有名な Śaṅkara の註釈のスタイルがどのようなものであるかも、おおよそ如実に知れるのではないか? さらに坐処の実例として、ただ「山の洞窟 (giri-guhā)」だけを出している点は注目すべきかも知れない。先に見たいわゆる Śaṅkara の作とされる『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の註釈 (iii) では、坐処の実例は何一つ付加されることなく、また、(ii) の本文中にあった「洞窟 (guhā)」が、「山の洞窟」とさえ置き換えられることもなく、そのままに放置されたのとも微妙な差異を示すものと言えるかも知れない。ただし、筆者が注目した『ヴィヴァラナ』に描き出された「坐処」の風景 (i) は、『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の伝える (ii) と、『バガヴァッドギーター』の伝える (iv) の重ね合わせより、ほぼ明瞭に浮かび上がってくるようである。ただし、次節以降に見る通り、(ii)(iv) 以降の成立であることが確実な諸文献の坐処の記述には、いずれもこの (ii)(iv) がなにがしか影を落としているとは言えるのである。だが、筆者が (i) の中で注目した、「坐処の方角」としての「東面ないし北面して」というのは、(ii) からも (iv) からも、また、それらに対する註釈 (iii) からも (v) からも、どこからも出てこないのである。この「方角」は、ヨーガに関わる『ヴィヴァラナ』作者の個性を明示するものなのであろうか?

. 坐処の拡大・組織化

以下には、いわゆる Patañjali のヨーガの体系とは系統を異にする、「他のヨーガ教学」とも言い得る「ハタヨーガ」の代表的な著作『ハタヨーガブラディーピカー』Haṭhayogapradīpikāの記す「坐処」を見てみよう。この著作は16、7世紀ころのものと考えられているが⁽¹¹⁾、そのルーツは必ずしも新しいものではない。

(vi) surāṅgye dhārmike deśe subhikṣe nirupadrave /
dhanuḥ-pramāṇa-paryantaṁ śilā-agni-jala-varjite /
ekānte mathikā-madhye sthātavyaṁ haṭha-yoginā //12//
alpa-dvāraṁ arandhra-garta-vivaraṁ na[^]atyucca-nīca-āyatam
samyag-gomaya-sāndra-liptam amalam niḥśeṣa-jantu-ujjhitam /
bāhye maṇḍapa-vedi-kūpa-ruciraṁ prākāra-samveṣṭitam
 proktaṁ yoga-māthasya lakṣaṇam idaṁ siddhair haṭha-abhyāsibhiḥ //13// (Hyp - 12 ~ 13:pp.10-11)

(6a)「行者は政治が正しく、人民が善良で、托鉢して食を得るのが容易で、そして犯罪のない国において、矢のとどく範囲に岩や火山や川がない人里離れた場所に庵室を結んで住むのがよい。」¹²「ハタの道にいそむ大師たちは、ヨーガの庵室の構えを次のように描いている。戸口は小さく、窓、床のくぼみ、すきま等が無く、高からず、低からず、広すぎず、如法に牛糞を厚く塗り、汚れなく、一ぴきの虫もおらず、戸外にはあずまや(亭)、テラス、井戸などがあって住み心地よく、まわりを塀がとりかこんでいる。」¹³ (佐保田[1973] 134頁)

(6b) 12. One, practising Haṭhayoga, should live alone inside a shrine, devoid of stone, fire and water up to an area of one dhanuḥ, situated in a kingdom with a good king, which is full of piety, devoid of torture, and where alms are easily available. / 13. With a small number of doors, without window, etc., low land and hole, not too high, nor too wide, clean, fully and thickly smeared with cowdung, absolutely devoid of animals, beautiful outside with maṇḍapa, vedi and well, enclosed by a wall such is the characteristic of a shrine for yoga, stated by the Siddhas who practise Haṭhayoga. (Banerji[1995], pp.225-226)

(6c) 12. He who practises Haṭha-yoga should live alone in a small

maṭha(monastery) situated in a place free rocks, water and fire to the extent of a bow's length and in a virtuous, well-ruled kingdom, which is prosperous and free of disturbances. / 13.The maṭha should have a small door, and should be without any windows; it should be level and without any holes; it should be neither too high, too low, nor too long. It should be very clean, being well smeared with cowdung and free from all insects. Outside, it should be attractive with a small hall(maṇḍapa), a raised seat and a well, and surrounded by a wall. These are the characteristics of a yoga-maṭha as laid down by the Siddha-s who have practised Haṭha-yoga. (Radha Burnier-Ramanathan [1972],pp.6-7)

この(vi)には、「ヨーガ行者のいる風景」が、より大きな視点で捉えられ、描き出されている。単なる「坐処」ではなしに、それが「庵/禅堂」のような建造物の中に位置づけられ、環境、その立地条件、その「庵/禅堂」の内景と外景、までもがかなり詳細に描かれているのである。これは、ヨーガの実践が個人的な秘めやかな行為から一步抜け出て、社会的にも公認されるに到った時代の推移を反映した結果と言えるのかも知れないが、実際のところは、わからない。

この(vi)に関しては、ブラフマーナンダ Brahmānanda によるやや長い註釈があるので、煩を厭わず、それも見てみよう。

(vii) atha haṭha-abhyāsa-yogyam deśam āha sārḍhena **surājya** iti /
rājñah karma bhāva vā rājyaṃ tac chobhanaṃ yasmin sa surājyaḥ, tasmin surāje /
yathā rājā tathā prajāḥ iti mahad-ukteḥ, rājñah śobhanatvāt prajānām api
śobhanatvaṃ sūcitam / dhārmike dharmavati / anena haṭha-abhyāsino^anukūla-
āhāra-ādi-lābhaḥ sūcitah / subhikṣa ity anena^anāyāsena tal-lābhaḥ sūcitah /
nirupadrave caura-vyāghra-ādy-upadrava-rahite / etena deśasya dīrgha-kāla-vāsa-
yogyatā sūcitā / dhanuṣaḥ pramāṇam dhanuḥ-pramāṇam catur-hasta-mātram, tat-
paryantam / śilā-agni-jala-varjite śilā prastaraḥ agniḥ vahniḥ jalam toyam tair
varjite rahite / yatra^āsanam tataś catur-hasta-mātre śilā-agni-jalāni na syur ity
arthaḥ / tena śīta-uṣṇa-ādi-vikāra-abhāvaḥ sūcitah / ekānte vijane / anena jana-
samāgama-abhāvāt kalaha-ādy-abhāvaḥ sūcitah / jana-saṃmarde tu kalaha-ādikaṃ
syād eva / tad uktaṃ bhāgavate **vāse bahūnām kalaho bhaved vārtā dvayor api**
iti / tādrṣe **maṭhikā-madhye** / alpo maṭho maṭhikā / alpīyasi kan / tasyāḥ madhye
haṭha-yoginā haṭha-abhyāsī yogī haṭha-yogī tena / śāka-pārthivādivat-samāsaḥ /

sthātavyam sthātum योगyam / **maṭhikā-madhya** ity anena śīta-ātapa-ādi-janīta-
kleśa-abhāvaḥ sūcītaḥ / atra **yukta-āhāra-vihāreṇa haṭha-yogasya siddhaye** ity
ardhaṃ kenacit kṣiptatvān na vyākhyātam / mūla-ślokanām eva vyākhyānam /
evam agre[^]api ye mayā na vyākhyātā śloka haṭha-pradīpikāyām upalabhyeran te
sarve kṣiptā iti boddhavyam //12//

atha maṭha-lakṣaṇam āha **alpa-dvāram** iti / alpaṃ dvāraṃ yasmin tat tādrśam /
randhro gava-akṣa-ādiḥ, **garto** nimna-pradeśaḥ, **vivaro** mūśaka-ahi-bilaṃ te na
santi yasmin tat tādrśam / atyuccaṃ ca tan nīcaṃ ca[^]atyucca-nīcaṃ, tac ca tad
āyatam ca[^]atyucca-nīca-āyatam / {viśeṣaṇam viśeṣyeṇa bahulam} (Pāṇ.,II-1.57)
ity atra bahula-grahaṇād viśeṣaṇānām karma-dhārayaḥ / nanu[^]ucca-nīca-āyata-
śabdānām bhinna-arthakānām kathaṃ karmadhārayaḥ / {tat-puruṣaḥ samāna-
adhikaraṇaḥ karma-dhārayaḥ} (Pāṇ.,I.2.42) iti tal-lakṣaṇād iti cen na / maṭhe
teṣāṃ sāmānādhikaraṇya-saṃbhavāt / na atyucca-nīca-āyatam na-atyucca-nīca-
āyatam, na-śabdena samāsān na-lopa-abhāvaḥ, na[^]ity pṛthak-padaṃ vā / atyucce
ārohaṇe śramaḥ syād ati-nīce[^]avaroḥaṇe śramo bhavet / atyāyāte dūraṃ dṛṣṭir
gacchet tan-nirākaraṇa-artham uktaṃ na-atyucca-nīca-āyatam iti / **samyak**
samīcīnatayā go-mayena go-purīṣeṇa sāndraṃ yathā bhavati tathā liptam / **amalaṃ**
nirmalam / **niḥśeṣā** nikhilā ye jantavo maśaka-matkuṇa-ādyās tair **ujjhitam**
tyaktaṃ rahitam / **bāhye** maṭhād bahiḥ-pradeśe / **maṇḍapaḥ** śālā-viśeṣaḥ, **vedih**
parīkṛtā bhūmiḥ, **kūpo** jala-āśaya-viśeṣaḥ, tai **ruciraṃ** ramaṇīyam / **prākāreṇa**
varaṇena samyag veṣṭitam paritobhitti-yuktam ity arthaḥ / **haṭha-abhyāsibhiḥ**
haṭha-yoga-abhyāsana-śilaiḥ **siddhaiḥ** / idaṃ pūrva-uktaṃ alpa-dvāra-ādikaṃ
yoga-maṭhasya lakṣaṇam svarūpaṃ **proktaṃ** kathitam / nandikeśvara-purāṇe tv
evaṃ maṭha-lakṣaṇam uktaṃ

‘mandiraṃ ramyavīnyāsaṃ mano-jñam gandha-vāsitam /
dhūpa-moda-ādi-surabhi kusuma-utkara-maṇḍitam //
muni-tīrtha-nadī-vṛkṣa-padminī-śaila-śobhitam /
citra-karma-nibaddhaṃ ca citra-bheda-vicitritam //
kuryād yoga-grhaṃ dhīmān suramyam śubha-vartmanā /
dṛṣṭvā citra-gatāṃś chāntān munīn yāti manaḥ śamam //
siddhān dṛṣṭvā citra-gatān matir abhyudyame bhavet /
madhye yoga-grhasya[^]atha likhet saṃsāra-maṇḍalam //

śmaśānaṃ ca mahā-ghoraṃ narakāṃś ca likhet kvacit /

tān dṛṣṭvā bhīṣaṇā-kārān saṃsāre sāra-varjite //

anavasādo bhavati yogī siddhy-abhilāṣukaḥ /

paśyaṃś ca vyādhitān jantūn natān mattāṃś calad-vraṇān // '13// (Jy,pp.10-12)

(7) さて、ハタ (haṭha) の修習 (abhyāsa) に適合せる (yogyā) 場所 (deśa) を、1 シュローカ半で、述べる。「surājya (よき王権のある)」と。王 (rājan) の行為 (karman) ないし状態 (bhāva) が、王権 (rājya) というものであるが、その [王権] が、素晴らしい (śobhana) ところの、その [場所] が、よき王権のある (surājya) ということ、そのよき王権のある [場所] で、「王ある如く、人民あり」という偉大言 (mahad-ukti) があるが故に。王が、素晴らしいならば、人民も素晴らしいということが、示されているのである。「dhārmika (法治の)」というのは、法のあるということである。これによって、ハタの修習者 (haṭha-abhyāsīn) には、快適な (anukūla) 食物 (āhāra) 等の獲得があるということが、示されているのである。「subhikṣa (布施の盛んな)」というこれによって、苦勞せずに、その [快適な食物等の] 獲得があるということが、示されているのである。「nirupadrava (無難な)」とは、盗賊・虎などの災難 (upadrava) がいないということである。これによって、場所の、長時間の居住の適合性が、示されているのである。弓の [有効な] 距離が、「dhanuḥ-pramāṇa (弓距離)」であり、4 ハスタの距離である。その [4 ハスタの距離] の範囲内に、ということである。「śilā-agni-jala-varjita (石・火・水を欠いている)」、 「śilā (石)」とは、岩石 (prastara) のことであり、「agni (火)」とは、火 (vahni) のことであり、「jala (水)」とは、水 (toya) のことであり、それらを、「virajita (欠いている)」とは、[それらが] ないということである。[つまり] 坐処 (āsana) のある、そこより4ハスタの距離において、石・火・水がないだろう、という意味である。それ故に、寒さ・暑さ等の変化 (vikāra) がいないということが、示されているのである。「ekānta (秘隅)」とは、人気ない (vijana) ということである。これによって、人々 (jana) との遭遇 (samāgama) がないので、喧噪 (kalaha) 等がないということが、示されているのである。しかるに、人々との遭遇 (saṃmarda) があるならば、喧噪等は、必ずやあるであろう。そのことが、『パーガヴァタ (プラーナ)』において、以下のように言われたのである、「多数者の住居

(vāsa) にあっては、喧噪が、あるいは、二人の〔住居に〕あっても、揉め事(ārtā)が、あるであろうと。「maṭhikā-madhya(庵室の中)」も、そのようである。小さな(alpa) 庵(maṭha)が、「maṭhikā(庵室)」である。〔この場合の〕「ka」は、より小さいものを〔意味する語である〕その〔庵室〕の中に、「haṭha-yogin(ハタヨーガ行者)が」ハタの修習者(haṭha-abhyāsin)たるヨーガ行者(yogin)が、ハタヨーガ行者(haṭhayogin)である、その者によって、ということである。「śāka-[bhojī-]pārthiva(野菜〔を享受する〕王)」等と同様な複合語である。「sthātavya(住まわしめられるべきである)」とは、住せしめられること(sthātum)が適合する(yogyā)ということである。「maṭhikā-madhya(庵室の中)」というこれによって、寒さ・暑さ等によって生じる煩惱(kleśa)がないということが、示されているのである。ここでは、「適合せる食物(āhāra)・精舎(vihāra)によって、ハタヨーガの成就の為に」という半〔シュローカ〕は、何者かによって、放擲されたが故に、説明されないのである。根本シュローカのみ、説明があるのである。このように、初めてであるにしても、わたしによっては説明されない諸シュローカは、『ハタ〔ヨーガ〕プラディーピカー』において、認識されるであろう、その一切は、放擲された、と知られるべきである。12

さて、庵の特徴を、述べる。「alpa-dvāra(小さな戸口を有する)」と。小さな戸口のあるところのそのものが、そのようなものなのである。「randhra(裂け目)」とは、牛目/風穴(gava-akṣa)等、「garta(坑)」とは、窪みの地点(pradeśa)、「vivara(隙間)」とは、鼠・蛇の坑(bila)それらの存在しないところのそのものが、そのようなものなのである。過度に高い(atyucca)それが、低い(nīca)というのが、過度に高い・低い(atyucca-nīca)であり、それが、広い(āyata)というのが、過度に高い・低い・広い(atyucca-nīca-āyata)ということである。「限定辞(viśeṣaṇa)は、被限定辞(viśeṣya)と共に、多様で(bahulam)ある。」(『パーニニストラ』-1-57)という、この〔『パーニニ・ストラ』-1-57〕に於いて、「bahula(多)〔の語〕が取られているが故に、諸限定辞は、同格限定複合語(karmadhāraya)である。「ucca(高い)」「nīca(低い)」「āyata(広い)」という諸語は、異なる意味を有するものであるから、どのようにして、同格限定複合語(karmadhāraya)であろうか? 「格限定

複合語 (tatpuruṣa) は、同一の基体 (samāna-adhikaraṇa) を有するならば、同格限定複合語である」(『パーニニーストラ』 -2-42) という、その [同格限定複合語の] 定義の故に、ともし [言うので] あるならば、そうではないのである。庵において、それら [諸限定辞] に、同一基体性が可能であるが故に。「nātyucca-nīca-āyata (過度に高い・低い・広いということがない)」とは、過度に高い・低い・広いということがない、ということである。「(na (ない))」という語との複合語の故に、「na (ない)」[という語の] 落失がないのである。または、個々の単語に対して、[過度に高くも][過度に低くも][過度に広くも]ない (na) ということである。過度に高い上昇 (ārohaṇa) には、労力 (śrama) がいるだろうし、過度に低い下降 (avarohaṇa) には、労力があるだろう。過度に広い (atyāyāta) 場合には、視線 (dṛṣṭi) が遠距離 (dūram) を行くであろう。それ [ら、] を拒否する為に、「na-atyucca-nīca-āyāta (過度に高い・低い・広いということがない)」と言われたのである。「samyak (正しく)」適当に、「gomaya (牛糞) で」、牛の糞によって、「sāndra (なめらかに)」なる、そのように、「lipta (塗られて)」いる。「amala (汚れなく)」汚れていない。「niḥśeṣa (残余無く)」一切の、蚊 (maśaka) ・南京虫 (matkuṇa) 等の、生類 (jantu) それらが「ujjhita (駆除された)」捨棄された、欠いた、ということである。「bāhya (外部)」とは、庵の外の地点ということである。「maṇḍapa (亭)」とは、一種の小屋 (śālā) である。「vedi (壇)」とは、飾られた、地帯である。「kūpa (井戸)」とは、一種の水貯めである。それらによって、「rucira (美しい)」快適である (ramanīya) ということである。「prākāra (塀)」、覆い隠すものによって、正しく囲まれた、[すなわち] 四方が壁 (bhitti) と結びついている、という意味である。「haṭha-abhyāsin (ハタの修習者)」、ハタヨーガの修習を習性としている、「siddha (成就者)」たちによって、この、先に言われた、小さな戸口を有する等が、「yoga-maṭha (ヨーガの庵) の lakṣaṇa (特徴)」、本性であると、「prokta (説かれた)」、語られたのである。しかしながら、『ナンディケーシュヴァラプラーナ⁽¹²⁾』(Nandikeśvarapurāṇa) においては、庵の特徴は、以下のように、言われているのである。

「好ましく飾られた、心楽しく、芳香のたきしめられた、香煙・香料等で香しい、花の山で飾られた、住居 (mandira) を、聖者・教師・川・樹

木・蓮華・岩(śaila)で荘嚴され(śobhita)そして、絵画(citra-karman)がかけられ、彫刻(citra-bheda?)が施された(vicitrita)美しい道があって極魅力的な、[住居を]賢者は、ヨーガの家(yoga-gr̥ha)と、為すべきである。描かれた(citra-gata)寂靜せる聖者たちを見て、意は、静止(śama)に、赴くのである。描かれた、成就者たちを見て、努力への、思念が起こるのであろう。そして、ヨーガの家の中に、輪廻曼荼羅を描くべきである(likhet)。どこかには、大いに恐ろしい墓地と、諸地獄を、描くべきである。恐怖を与える、それらを見て、儻い(sāra-varjita)輪廻にあって、ヨーガ行者は、疲弊することなく、成就(siddhi)を欲する者(abhilāṣuka)となるのである。そして、病める(vyādhita)沈める(nata)狂える(matta)進行しつつある腫瘍(vraṇa)を持てる、生類を、見つづ。⁽¹³⁾

13 (拙訳)

また、『ハタヨーガプラディーピカー』と並んで、「ハタヨーガ」の体系を伝えるもう一つの重要な著作『ゲーランダサンヒター』⁽¹⁴⁾Gherandasamhitāには、以下のようにある。

(viii) dūra-deśe tathā[^]araṇye rāja-dhānyām jana-antike /
yoga-ārambhaṃ na kurvīta kṛtāś cet siddhi-hā bhavet //3//
aviśvāsaṃ dura-deśe araṇye bhakṣa-varjitaṃ /
loka-araṇye prakāśaś ca tasmāt trīṇi vivarjayet //4//
sudeśe dhārmike rāṇye subhikṣe nirupadrave /
tatra[^]ekaṃ kuṭīraṃ kṛtvā prācīraiḥ pariveṣṭayet //5//
vāpī-kūpa-taḍāgaṃ ca prācīra-madhya-varti ca /
na[^]atyuccaṃ na[^]atinīcaṃ vā kuṭīraṃ kīṭa-varjitaṃ //6//
samyag go-maya-liptaṃ ca kuṭīraṃ randhra-varjitaṃ /
evaṃ sthāne hi gupte ca prāṇāyāmaṃ samabhyaset //7// (GsV-3 ~ 7:pp.146-148)

(8) 遠隔の場所(dūra-deśa)、森(araṇya)、王都(rājadhānī)また、人里近く(janāntika)では、ヨーガの事業(yoga-ārambha)を為すべきではない。もし、[それが]なされたならば、成就を損なうものとなるであろう。

3 遠隔の場所(⁽¹⁵⁾dura-deśa?)にあっては、信仰がなく(aviśvāsa)森にあっては、飲食がない。世間森(loka-araṇya)にあっては、公開性(prakāśa)がある。それ故に、[以上の]3者を、避けるべきである。4 王国(rājya)内の、法治の、布施の盛んな(subhikṣa)、無難な

(nirupadrava)、良き場所で、[ヨーガの着手/事業をなすべきである。]そこに、一つの、小屋(kuṭīra)を、造り、諸塚(prācīra)によって、囲ましめるべきである。5 そして、池(vāpī)・井戸(kūpa)・水溜(taḍāga)を、塚の中に設置し、小屋は、高過ぎず、低過ぎず、虫(kīṭa)がない。6 そして、小屋は、正しく、牛糞(gomaya)で塗られ(lipta)、裂け目/穴坑(randhra)がない。実に、このような、隠秘なる(gupta)場処(sthāna)において、調息(prāṇāyāma)を、修すべきである(samabhyaset)。7⁽¹⁶⁾(拙訳)

さらに、以下には、『ヨーガタットヴァウパニシャッド』⁽¹⁷⁾ Yogatattva-upaniṣad に於ける記述を見てみよう。

(ix) prāṇāyāmaṃ tataḥ kuryāt padma-āsana-gataḥ svayam /
 suśobhanaṃ maṭhaṃ kuryāt sūkṣma-dvāraṃ tu nirvraṇam //32//
 suṣṭhu liptaṃ go-mayena sudhayā vā prayatnataḥ /
 matkuṇair maśakair lūtair varjitaṃ ca prayatnataḥ //33//
 dine dine ca saṃmr̥ṣṭaṃ saṃmārjanyā viśeṣataḥ /
 vāsitaṃ ca sugandhena dhūpitaṃ guggula-ādibhiḥ //34//
 na^atyucchritaṃ na^atinīcaṃ caila-ajina-kuśa-uttaram /
 tatra^upaviśya medhāvī padma-āsana-samanvitaḥ //35//

[rju-kāyah] prāñjaliś ca praṇamed iṣṭa-devatām / (Ytup 32 ~ 36a:pp.255-256)

(9a)「次に、自ら蓮花坐の姿勢をとりて、調息(prāṇāyāma)を行なうべし。極めて清らかなる禅堂(maṭha)を建てよ。それは微小の入口ありて、隙間なきものなり。」³² 「それは牛糞或いは石灰によりて浄化のために努力して良く塗らるべきなり。南京虫、虻、蜘蛛(lūta)より、努力して防拒せらるべし。」³³ 「日ごとに特に幕にて清掃せよ。妙香にて薫ぜよ。安息香等によりて煙をたてよ。」³⁴ 「高きに過ぎず低きにも過ぎざる、衣(caila)と皮と草の座の上に、賢者は蓮花坐を組んで昇り、」³⁵ 「身体を真直くにして合掌し、守護神を敬礼すべし。」^{36a} (金倉[1974] 219-220頁)

(9b) 次いで、自ら、蓮華坐にあつて、調息(prāṇāyāma)を為すべきである。微小な戸口を持つが、損傷のない、甚だ素晴らしい(suśobhana)、庵(maṭha)を、構えるべきである。³² 牛糞ないし石灰にて、努めて適切に塗り込め、かつ、南京虫、蚊、蜘蛛を、努めて駆除し(varjita)、³³

さらに、日々、特に、幕によりて、清掃し、芳香によりて、たきしめ、安息香等によりて、爇す [べきである。] 34 [坐処は、] 高過ぎず、低過ぎず、布・皮・クシャ草を覆いとす。聡明なる者は、その [坐処] に、入坐して、蓮華坐を組み、 35 身体を真っ直ぐにして (rju-kāya)、合掌し、守護神に平伏すべきである。 36a (拙訳)

・坐処の方角：シャンカラとデーヴァラ

前節までに見たところによって、「坐処」を廻ってインド人がいかなる思弁を凝らしたかの概要はほぼ知れるものと愚考する。が、予想に反して、『ヴィヴァラナ』作者の (i) に見られた「坐処の方角」については、他に触れるものがなかった。やや不思議にも思われるが、やはり、それこそが、未だ明確にならない Śaṅkara と呼ばれる『ヴィヴァラナ』作者の正体を示すものと言い得るのだろうか？「東面ないし北面して」という記述の意味するのはいったい何なのか？ ヨーガは「東面ないし北面して」修すべきものなのか？ その「方角」には、いったいどういう意味が込められているのか？

ところがである、これぞ正真正銘の Śaṅkara の著作の中に以下のような記述 (x) が見いだされるのである。その (x) が、先に重要な資料として見た『シュヴェーターシャヴァタラウパニシャッド』の (ii) と『バガヴァッドギター』の (iv) の引用を含んでいるという点からだけでも今の場合見過ごしに出来ないように思われるが、さらに、「坐処とその方角」が結びつけて論じられている点でもまさしく注目すべきであろう。解脱を達成する為の手段として、ヴェーダーンタ学徒にとって重要なものである「念想 (upāsana)⁽¹⁸⁾」を廻っての記述である。Śaṅkara の巨篇『ブラフマーストラ註解』Brahmasūtraśāṅkara-bhāṣya 中のものである⁽¹⁹⁾。

(x) smaranti ca //10//

smaranty api ca śiṣṭā upāsana-aṅgatvena^āsanam 'śucau deśe pratiṣṭhāpya sthiram āsanam ātmanaḥ' ity ādinā / ata eva padmaka-ādiinām āsana-viśeṣānām upadeśo yogaśāstre //10//

yatra^eka-agratā tatra^aviśeṣāt //11//

dig-deśa-kāleṣu saṁśayaḥ kim asti kaścīn niyamo na^asti vā^iti / prāyeṇa vaidikeṣv ārambheṣu dig-ādi-niyama-darśanāt syād iha^api kaścīn niyama iti yasya matis taṁ pratyāha dig-deśa-kāleṣv artha-lakṣaṇa eva niyamaḥ /

yatra[^]eva[^]asya diśi deśe kāle vā manasaḥ saukaryeṇa[^]ekāgratā bhavati tatra[^]eva[^]upāsita; prāci-dik-pūrva-ahna-prācīna-pravana-ādivad viśeṣa-aśravaṇāt, eka-agratāyā iṣṭāyāḥ sarvatra[^]aviśeṣāt / nanu viśeṣam api kecid āmanti ‘same śucau śarkarā-vahni-vāluka-vivarjite śabda-jala-āśraya-ādibhiḥ / manonukūle na tu caṣu-piḍane guhā-nivāta-āśrayaṇe prayojayet’ iti yathā[^]iti / ucyate satyam asty evaṃjātīyako niyamaḥ / sati tv etasmiṃs viśeṣv aniyama iti suhr̥d bhūtvā[^]ācārya ācaṣṭe / manonukūle iti ca[^]eṣā śrutir yatra ekāgratā tatra[^]eva[^]ity etad eva darśayati //11// (Bssbh, -1-10 ~ 11; pp.949-950)

(10) 《また、[ヴェーダの識者(śiṣṭa)たちは、念想(upāsana)の支分(aṅga)として、坐法(āsana)を、]伝承している(smaranti)》(Bs - i-10)

また、ヴェーダの識者たちは、念想の支分として、坐法を、伝承している。「清らかな(śuci)場所(deśa)に、堅固な(sthira)、自己の為の、坐処(āsana)を、設置した後に(pratiṣṭhāpya)・・・」等と。まさしくこの故に、ヨーガ教学(yoga-śāstra)において、蓮華坐(padma)等の個々の諸坐法に関する教示があるのである。 10

《専注(ekāgratā)のある、「まさしく」そこにおいて[念想すべきである]、差異性がないが故に(aviśeṣāt)》(Bs -i-11)

方角(dik)・場所(deśa)・時間(kāla)に関して、疑問がある。「なにがしかの規定(niyama)があるのか、ないのか?」と。「諸々のヴェーダ聖典に基づく(vaidika)事業(ārambha)には、たいてい、方角等に関する規定が見られるが故に、この場合にも、なにがしかの規定が、あるだろう」と考える者に対して答える。方角・場所・時間に関しては、目的の特徴こそが、規定なのである。他ならぬ、なにがしかの方角、場所、ないし時間において、容易に、意の、専注がある、まさしく、そこにおいて、念想すべきである(upāsita)。「東の方角(prāci-dik)」・「午前(pūrva-ahna)」・「東斜面(prācīna-pravana)」等のような、[方角・時間・場所に関する]差異性が啓示されていない(aśravaṇa)が故に、また、望まれた専注が一切処において無区別であるが故に。或る者たちは、差異性をも、希求しているではないか? 「平坦で清らかな、小石、火、砂のない所、音声(śabda)・池(jala-āśraya)等によって、意には快適で、しかも目を圧する[場所]でない、洞窟・風のない避難所で、ヨーガを実修すべきであ

る。」とちょうどそのように、と。[これに関して]言われる。「確かに、その手の、規定は、ある。しかるに、その[規定]がある場合、諸々の差異性に関して、規定があるのではない。」ということ、意図して、[經典作者パーダラーヤナが]同朋(suhṛd)として、説明されたのである。そして、「意には快適な」という、その天啓聖典(śruti)は、專注(ekāgratā)のある、まさしくそこにおいて[念想すべきである]という他ならぬそのことを、示しているのである。11⁽²¹⁾(拙訳)

いかがであろうか？ この Śaṅkara の記述には、念想にあたっては、『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の(ii)のように、一見場所(deśa)に関して、規定があるように見えるものがあるが、その実、その規定は、場所の差異性に関してあるのではない、「意の專注」が可能であるならば、場所はどこでもよい、と解してよい、というヴェーダーンタの立場が明瞭に述べられているのである。この解釈は、冒頭において見た、『ヴィヴァラナ』作者の、『ヨーガスートラ』46に対する解釈「堅固にして、かつ楽なものが、坐法である。その、坐法に、住せる者には、諸々の意・肢体の、堅固性が生じる。そして、その[坐法]によったならば、苦が生じない、ところの、その[坐法]を、修習すべきである。」と通じるものがある。すなわち、ヨーガをうまく実修出来るなら、その場所などはどうでもよい。その立場は、「他の教学」に依拠して続いて紹介される「東面ないし北面して」という、問題の「坐処の方角」規定と相矛盾するようにも、見えるのである。それをいったい、どう解釈すべきなのか？ 『ヴィヴァラナ』作者が依拠した「他の教学」に、その「坐処の方角」規定が盛り込まれていたものを、そのまま敷衍する形で、『ヴィヴァラナ』作者が紹介してしまったということなのか？ して、その『ヴィヴァラナ』作者が依拠した「他の教学」とは何なのか？ 先にも見た通り、Patañjali のヨーガ体系とは別系統と見なし得るものを代表する「八タヨーガ」の文献中にも、「坐処の方角」に関する規定は見いだすことが出来なかった。失われた「ヒラニヤガルバのヨーガ教学」Hairaṇyagarbhayogaśāstra ということになるのだろうか？⁽²²⁾

筆者は、この問題に行き暮れていた最中、ラクシュミーダラ Lakṣmīdhara による『クリトヤカルパタル』Kṛtayakalpataru の以下の用例(xi)に遭遇したのであった。この著作は12世紀ころに著された膨大なスムリティ簡易集成と言うべきものである。

(xi)devalaḥ

devatā-āyatanam⁽²³⁾ śūnyāgāra-giri-kandara-nadī-pulina-guhā-aranyānām
 anyatame śucau nirābādhe vibhakte samupastīrṇa-mānaśam[samupastīrṇam
 āśanam⁽²⁴⁾] krtvā, tasmin laghv-āhāro nirāmayah, śucīḥ śiro-grīvā-pāṇi-pādaḥ ca
 samāsthāpya, śarīram rjūm samādhāya, śīśna-vṛṣaṇāv apīḍayan, yat kiñcid
 apāśritya svastikaṃ bhadrakaṃ maṇḍalaṃ vā⁽²⁵⁾ adhiṣṭhāya, udañ-mukhaḥ, prāñ-
 mukho vā, dantair dantān asaṃsprśya, akṣibhyāṃ avyaktam anuṃmīlya ca,
 mukha-nāsikābhyāṃ aikya-avasanna-agra-sthita-dṛṣṭiḥ, sarva-indriyāṇi
 saṃhṛtya⁽²⁵⁾ ūrdhvaṃ prāṇān uddīrya, manasā tac cintanaṃ dhyānam⁽²⁵⁾ (Kk,p.181)

(11) デーヴァラは、[言う]

「神の居処 (devatā-āyatana)、空家 (śūnyāgāra)・山 (giri)・峡谷 (kandara)・川の中洲 (nadī-pulina)・洞窟 (guhā)・森 (aranya)のうち
 の、いずれかの、清らかな (śuci)、無難な (nirābādha)、分離された (vibhakta)⁽²⁶⁾
 [場所]にて、正しく覆い揚げられたる (samupastīrṇa)、坐処 (āsana)を、
 設えた後に、その[坐処]に、軽食せる、壮健にして、清らかな (śuci)
 [者は]、頭・頸・手・足を昇らしめ (samāsthāpya)、身体 (śarīra)を真つ直ぐ
 (rju)に、構え (samādhāya)、男根・陰囊の両者を、圧することなく
 (apīḍayat) その、なにがしかに、依拠することによって (apāśritya)
 卍[坐]、吉祥[坐]、ないし円輪[坐]に坐し (adhiṣṭhāya)、北面 (udañ-mukha)
ないし東面 (prāñ-mukha)して、齒によって齒に、接触させること
 なく、さらに、両目を、不明瞭にして、開くことなく、口と鼻の両者
 が、一つに終わる先端に視線を据え、一切の根を、撤退し、諸息を、
 上方に、発揚し、[行ずる、]ところの、意による、その、思惟が、静慮 (dhyāna)
 である。」(拙訳)

いかがであろうか？ この『クリトヤカルバタル』中に見られる、デーヴァラ Devala の所説こそが、問題の『ヴィヴァラナ』作者の伝える「坐処」描写と見事に重なり合うのではないだろうか？ Devala とは、知る人ぞ知る聖賢の名前である。しかも、あの Śaṅkara が、『ブラフマーストラ註解』の中で、「デーヴァラ等の、なにがしかのダルマーストラ作者たちによって」“devala-prabhṛtibhiḥ ca kaiścid dharma-sūtra-kārair⁽²⁷⁾”と言及する人物と考えるべきである。つまり、『クリトヤカルバタル』の作者 Lakṣmīdhara によって、その Devala との名前と共に、その所説が引かれているというわけである。⁽²⁸⁾ 直接の結びつき

は未だ定かではないとしても、問題の (i) とこの (xi) が、「坐法」ないし「坐処」に関して、共通の「他の教学」ヨーガ文献の記述を踏まえていることは、ほぼ間違いないところであろう。言葉は正確に対応しないものの、他では決して見受けられなかった、坐処の立地実例列挙の先頭に、「神の居処」が置かれている点にも注目すべきであろう。また、(i) では、「東面ないし北面」とあったものが、「北面ないし東面」となっている点も興味深いところである。実修者が、その実修に先だって「清らかな (śuci)」と形容されている点も両者見事に符合するのである。⁽²⁹⁾ 仮に『クリトヤカルパタル』の記述 (xi) が、『ブラフマーストラ註解』の Śaṅkara も知る Devala の著作の記述をしっかりと反映させているのだとするならば、ある意味では特異な「坐処」の記述を含む『ヴィヴァラナ』と、真正 Śaṅkara との親縁性を証する具体的な一つの典拠が示されたことになる。

そもそも Devala の名前は、『ブラフマーストラ註解』作者の Śaṅkara とのからみで話題になるのが常である。これは、先にも触れた、Patañjali のとは別の、「ヒラニヤガルバのヨーガ教学」が、やはり、常に『ブラフマーストラ註解』作者の Śaṅkara とのからみで話題になるの⁽³⁰⁾と、見事に呼応しているようである。真正 Śaṅkara も『ヴィヴァラナ』作者も、共に、「ヒラニヤガルバのヨーガ教学」と、謎の法典作者 Devala を見ている！⁽³¹⁾ ことになる。それはともかくとして、現行『ヴィヴァラナ』から、Devala の名前は回収されないとしても、『ヴィヴァラナ』作者の個性を明示する一資料となる筈である。⁽³²⁾

さて、『ヴィヴァラナ』の (i) や Devala の所説を伝える (xi) であるが、何故、そこに、「坐処」は「東面ないし北面して / 北面ないし東面して」とあるのであろうか？ その謎を解く鍵は、筆者の見るところ、以下の『マヌ法典』 Manusmṛti -58 ~ 61 にあるように思われる。

(xii) brāhmeṇa vipras tīrthena nitya-kālam upaspr̥šet /
kāya-traidaśikābhyāṃ vā, na pitryeṇa kadācana //58//
aṅguṣṭha-mūlasya tale brāhmaṇ tīrthaṃ pracakṣate /
kāyam aṅguli-mūle^agre daivam pitryam tayor adhaḥ //59//
trir ācamed apaḥ pūrvaṃ dviḥ pramṛjyāt tato mukham /
khāni ca^eva spr̥śed adbhir ātmānaṃ śira eva ca //60//
anuṣṇābhir aphenābhir adbhis tīrthena dharmavit /
śauca-īpsuḥ sarvadā^ācamed ekānte prāg-udañ-mukhaḥ //61//⁽³³⁾

(Ms -58 ~ 61:i,p.258)

(12) パラモンは、ブラフマンの (brāhmaṇa) ティールタ (tīrtha) を用いて、常時、嘍るべきである (upasr̥ṣet) 、「あるいは」ブラジャーパティの (kāya) 「ないし」神々の (traidaśika) 「ティールタ」を用いて。「しかるに」いかなる場合にも、祖霊の「ティールタ」を用いて「嘍るべきでは」ない。

58 親指 (aṅguṣṭha) の根元の掌に、ブラフマンのティールタが存すると考える。ブラジャーパティの「ティールタ」は、「小」指 (aṅguli) の根元に、神々の (daiva) 「ティールタ」は、「指の」先端に、祖霊の (pitrya) 「ティールタ」は、その「親指と人差し指の？」両者の下に (adhas) 59 先ずは、3度、水を、嘍るべきである (ācamet) 、「次いで」、2度、口を、擦布すべきである (pramr̥jyāt) 、「また同じく」、水によって、「頭部にある」諸腔 (kha) を、アートマン/心臓 (ātman) を、また、他ならぬ頭 (śiras) を、濡らすべきである (spr̥ṣet) 、「60 清め (śauca) を得んと欲する、法知者は、秘隅 (ekānta) にあって、東「面ないし」北面して (prāg-udān-mukha) ティールタを用いて、熱くない、泡のない、水によって、嘍るべきである (ācamet) 、「61⁽³⁴⁾ (拙訳)

また、さらに以下のような『ガウタマ法典』Gautamadharmasūtra -35 ~ 37の用例 (xiv) 等を見たならば、よりその意味が明確になるかも知れない。「清め (śauca)」の為に行われるべき「禊ぎ/水を嘍る (ācamana)」行為が、「清らかな⁽³⁵⁾ (śuci) 場所 (deśa) に」「坐して (āsīna)」行うものであることに注目すべきであろう。

(xiii) prānmukha udānmukho vā^āsīnaḥ śaucam ārabheta //35// śucau deśa āsīno dakṣiṇaṃ bāhuṃ jānv-antarā kṛtvā yajña-upavītyā maṇi-bandhāt pāṇi prakṣālya vāg-yato hr̥daya-spr̥śas triś catur vā^āpa ācāmed dviḥ parimr̥jyāt pādau ca^abhyukṣet khāni ca^upasr̥ṣec chīrṣaṇyāni mūrdhani ca dadyāt //36// suptvā bhuktvā kṣutvā ca punaḥ //37// (Gds -35 ~ 37:p.122)

(13) 東面 (prānmukha) ないし北面 (udānmukha) して、坐し (āsīna) 、「清め (śauca) を、為すべきである (ārabheta) 、「35 清らかな (śuci) 場所 (deśa) に、坐して (āsīna) 、「右の腕を膝の間に (jānv-antarā) 置き、聖儀紐 (yajña-upavīti) を着け、手首よりの、両手を、洗い清め (prakṣālya) 、「言葉無く、心臓に接触する、水を、3度ないし4度、嘍るべきである (ācamet) 、「そして、2度、「口を」擦布すべきである。さらに、

両足に、灌水すべきである (abhyukṣet)、そして、頭部にある (śīrṣaṇya) 諸腔 (kha) を、擦布すべきである (upaspṛṣet)、さらに、頭頂 (mūrdhan) を、濡らすべきである (spṛṣet)。36 眠った後 (suptvā)、食べた後 (bhuktvā)、また嘔をした後には (kṣutvā)、再び [水を啜り、清めを為すべきである⁽³⁶⁾]。(拙訳)

いかがであろうか？ この『マヌ法典』『ガウタマ法典』の用例 (xii)(xiii) 等と、『ヴィヴァラナ』の (i) や Devala の所説 (xi) を詳細に比較すべきである。(xii)(xiii) などが示す、本来、ヴェーダの伝統の中で培われた(?)「清め」の目的で、「清らかな場所で」、「東面ないし北面して」、「坐して」、行う、「裸ぎ/水啜り」の儀礼の作法が、やはり有名な『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の (ii) と『バガヴァッドギーター』の (iv) などをベースとして、一つの「ヨーガ教学」の中に取り込まれた結果が、問題の (i)(xi) であるように推定出来る、われわれには読めるのである。こうした推定を実りあるものとする為には、本稿では敢えて棚上げした「ヨーガ」や「坐法」そのものの詮議を必要とするであろう。だが、そのことを承知の上で、この推定は、われわれをさらにいくつかの想像へと誘うように思われる。インドの文化歴史研究への新参者の如き筆者でも、幾ばくかの試行錯誤の果てに、(i) の「東面ないし北面して」と、有名な『マヌ法典』に見られる (xii) をリンクさせ得るのであるから、『ブラフマストラ』に対して (xi) のような註釈を書き得るバラモン哲学の巨人たる Śaṅkara が、それに対するコメントもなしに、(i) の如きパラフレーズを行うものであろうか？ また、唯『クリトヤカルパタル』のみから、Devala の名前と共に回収される (xi) や、それに対応するような『ヴィヴァラナ』の (i) の内実は、果たして、どれほどに古くまた権威あるものなのか？ それは本当に、失われた「ヒラニヤガルバのヨーガ教学」に実際にアクセスし得たと言われる⁽³⁷⁾『ブラフマストラ註解』作者 Śaṅkara 以前のものたり得るのか？ して、(i)(xi) とその「ヒラニヤガルバのヨーガ教学」の関係はいかなるものなのか？ その決着には当然ながら、まだまだ途方もない作業が必要であり、本稿の目的を大きく越え出るものである。

・ヨーガ行者のいる風景 結語に代えて

以上で、『ヴィヴァラナ』の (i) に触発されて始められた、「坐処」「ヨーガ行者のいる風景」へのアプローチは、一通り終わった。以下には、その補足の

意味を込めて、なお若干の用例について簡単に触れてみたい。Devala の (xi) が見られた『クリトヤカルパタル』のほぼ同一の箇所には、『マールカンデーヤプラーナ』 Mārkaṇḍeyapurāṇa よりの引用があるのでそれを引こう。それが「坐処」の新たな記述を与えるものであると同時に、『クリトヤカルパタル』という著作の真正性をかすかにでも明らかにしておく必要を感じるためでもある。(xiv) の 3 シュローカが、いずれも現行『マールカンデーヤプラーナ』に⁽³⁸⁾ 対応するものを見出し得ることを確認しておきたい。

(xiv) mārkaṇḍeya-purāṇe

sūnyeṣv eva^avakāṣeṣu vaneṣu ca guhāsu ca /
nitya-yuktaḥ sadā yogī dhyānaṃ samyaḥ upākramet //
saśabde^agni-jala-abhyāse jirṇe goṣṭhe catuṣpathe /
śuṣka-parṇa-caye nadyāṃ śmaśāne sasarīṣpe //
sabhaye kūpa-tīre vā caitya-valmīka-saṅcaye /
deśeṣv eteṣu tattva-jñō yoga-abhyāsaṃ vivarjayet // (Kk,pp.176-177)

(14) 『マールカンデーヤプラーナ』には、[以下のように言われている。] 「常にヨーガに専念せる、ヨーガ行者 (yogin) は、まさしく空虚なる土地や、森や、洞窟 (guhā) において、常時、禅定 (dhyāna) に、正しく、入るべきである。音声の伴う [場所]、火・水の近く [の場所]、古い牛舎、四辻、枯れた葉の堆積 [場所]、川、墓地、蛇のいる [場所]、恐ろしい [場所]、あるいは、井戸のほとり、チャイトヤ・蟻塚の集まった [場所]、真実を知れる者たちは、それらの諸々の場所においては、ヨーガ (yoga) の修習 (abhyāsa) を、⁽³⁹⁾ 避けるべきである。」(拙訳)

これまで見た色々な記述と異なる点は、「坐処」としては不適切な場所がやや具体性をもって描かれている点であろう。「音声 (śabda)」は、やはり「坐処」には、相応しくないということが明記されている点も興味深い。『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の (ii) の二重下線部に対する一つの解釈を示したものと言えるかも知れない。

次の用例 (xv) は、本稿では敢えてこれまで触れることをしなかった、仏典における「坐処」である。当初筆者は、「東面ないし北面して」に関して、漠然とした一つの作業仮説のようなものを持っていたのだが、結局それはからぶりに終わった。⁽⁴⁰⁾ (xv) は、有名な『沙門果経』よりの一節であるが、そこに、(i) の他では決して目にし得ぬ、「坐処の方角」に関連しそうな記述を見出し

たと考えての作業仮説であった。

(xv) so iminā ca ariyena sīla-kkhandhena samannāgato iminā ca ariyena indriya-saṃvareṇa samannāgato iminā ca ariyena sati-sampajaññaṇa samannāgato imāya ca ariyāya santuṭṭhiyā samannāgato vivittaṃ senāsaṇaṃ bhajati, araññaṃ rukkha-mūlaṃ pabbataṃ kandaraṃ giri-guhaṃ susānaṃ vana-patthaṃ abbhokāsaṃ palāla-puñjaṃ. so pacchābhattaṃ piṇḍapāta-paṭikkanto nisīdati pallaṅkaṃ ābhujitvā ujum kāyaṃ paṇidhāya parimukhaṃ satim upatṭhapetvā. (Dn,ii,67:i,p.71)

(15a)「さて[以上のように]、かれ(修行僧)は、この高貴な一連の戒を身につけ、この高貴な感覚器官の制御を身につけ、この高貴な注意力と明瞭な意識を身につけ、この高貴な満足を身につけて、森・木の根本・山・峡谷・洞窟・墓地・藪地・露地・積んだ藁といった人里離れた寝起きの場所に親しみます。[そして]かれは托鉢から戻り食事の後、両足を組み(結跏趺坐)⁽⁴¹⁾身体をまっすぐにし、前に注意力を集中して坐ります。」(森[2003]91頁)

(15b)「かれは、この聖なる戒蘊をそなえ、この聖なる感官の防護をそなえ、この聖なる念と正知をそなえ、この聖なる満足をそなえ、森、樹下、山、峡谷、洞窟、墓地、山林、露地、藁積みといった静寂の臥坐所に親しみます。かれは、食後、托鉢から戻ると、結跏趺坐を組み、身体を真直ぐに保ち、全面に念を現前させて、坐ります。」(片山[2003]213頁)

いかがであろうか？ この(xv)には、坐処立地の実例として複合語としてではなく、aranya (arañña) 森、vr̥kṣa-mūla (rukkha-mūla) 樹下、parvata (pabbata) 山、kandara (kandara) 峡谷、giri-guhā (giri-guha) 山の洞窟、śvasāma/śmasāna (susāna) 墓地、vana-prastha (vanapattha) 藪林、abhyavakāsa (abbhokkāsa) 露天処、palāla-puñja (palāla-puñja) 藁積み、といった9例が別個に列挙されている。さらに、「坐所の方角」に関連しそうな、すなわち、「東面ないし北面して」に関連しそうな、parimukhaṃ という、-mukha を含む副詞句が用いられている。しかも、最新の和訳と言うべき(15a)(15b)の2訳「前に」「全面に」に見る通り、その解釈が必ずしも一意的に明瞭ではなさそうな点が、筆者の興味を引いたのであった。が、『パーニニースートラ』Pāṇinisūtra -4-29にも登場する、この副詞句の解釈は今はおくとして、前者、「坐処立地の実例」についてだけは、問題点を指摘しておきたい。先ず

は、この(xv)に見られる「坐処立地の実例」の豊富さは、もしかしたら、その記述の歴史的古さを証したてるものかも知れない、と思考する。前節で(i)との関連で見た Devala の (xi) の中に見られる実例と、この『ディーガニカーヤ』Dīghanikāya 中の(xv)がかなりうまい対応を示しているように思われる。(xi)においては、一つの複合語として表されている立地実例のうちの「山」「峡谷」「洞窟」「森」の4点である。(xi)中の -giri-kandara- ~ -guhā- の解釈に関しては、giri-guhā などの用例共々、今後さらに検討する必要があるだろう。giri と kandara なのか、giri の kandara なのか? kandara と guhā の関係は? つまり、「山」と「峡谷」と「山の洞窟」と単なる「洞窟」の関係である。本稿に掲げた多数の訳例は拙訳を含めて、再検討が必要となるであろう。

以上、『ヴィヴァラナ』の「坐処」「ヨーガ行者のいる風景」の記述(i)への、注記を付す作業は、ひとまず終了である。最後に、筆者がががつて、やはり Śaṅkaraの著作として知られる『プラパンチャサーラタントラ』Prapañcasāra-tantra との関連性を指摘した、11、2世紀ころの匿名の「インド百科」、『プラパンチャフリダヤ』Prapañcaḥṛdayaの「ヨーガ章」の「坐処」を引いて、結びとしたい。⁽⁴²⁾

(xvi) atha yogasya prayogaṃ vakṣye
 'śubhe kāle śubhe deśe śubha-kṣetra-ādike punaḥ /
 vijane jantu-rahite niśśabde bādha-varjite //
 sūpalīpta-sthale saumye gandha-puṣpa-adhivāsīte /
 ++ mukta-samākīrṇe vitāna-ādi-vicitritre //
 tathā kuśa-samītoya-phala-puṣpa-samanvite /
 na^agny-abhyāśe jala-abhyāśe śuśka-parṇa-caye^api vā //
 na daṃśa-maśaka-ākīrṇe sarpa-śvāpada-sevite /
 na ca duṣṭa-mṛga-ākīrṇe na bhaye durjana-āvṛte //
 śmaśāne caitya-valmīka-jīrṇa-āgāre catuṣpathe /
 nadī-nada-samudrāṇāṃ tīre rathyā-anatre^api vā //
 na jīrṇa-udyāna-goṣṭha-ādau na^aniṣṭe na ca nindīte /
 na jīrṇa-amara-sodgāre na ca viṇmūtra-vāsīte //
 na cchardyaṃ na^atisāre ca na^atibhukta-śrama-anvītaḥ /
 na ca^aticintā-kulīto na ca^atikṣut-pipāsītaḥ //
 na^api sva-guru-karma-ādau prasakto yogam ācāret / (Ph,pp.93-94)

(16) さて、[わたしは、] ヨーガの実修方法について述べよう。

「素晴らしい時間、素晴らしい場所、さらに素晴らしい国土等において、人気ない、生類のいない、音声の絶えた、無難な、よく塗り込められた地面を持つ、快適な、芳香花が薫る、自由で(++mukta) 正しく覆われた、天蓋等で飾られた、さらに、クシャ草・薪・水・果実を備えた、火の近くでも、水の近くでも、枯れた葉の堆積[場]でもない、虻・蚊の襲来も、蛇・猛獣の居住もない、また、悪性の獣の襲来がなく、悪人の潜伏という恐怖もない、墓地、チャイトヤ・蟻塚・古家、四つ辻、川・小川・海のほとり、もしくは、大道内でも[なく、] 古い庭園や牛舎等ではなく、忌避されたり、非難されたる[場所]でない[坐処]において、嘔吐時でなく、下痢時でなく、過食による倦怠感もなく、また、過度の思考で動揺してもおらず、また、過度の飢渴状態にもない[時に]、そしてまた、自らの師の仕事等に縛られることなしに、ヨーガを行わずべきである。(拙訳)

テキスト・略号・参考文献

Bh:Bhāmatī Bs

Bhg:Bhagavadgītā (Works of Śaṅkarācārya, Vol.2, 1988: Reprint Ed.)

Bhgsbh:Bhāṣya ad Bhg Bhg

Bs: Brahmasūtra (Nirṇaya Ed., 1938: 2nd Ed.)

Bssbh:Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya Bs

Dn:Dīghanikāya (Vol. I, PTS Ed. 1975: Reprint)

Gds:Gautamadharmasūtra (Olivelle Ed. Delhi, 2000)

Gs:Gheraṇḍasaṃhitā (P. Thomi Ed., 1993)

HDS:History of Dharmaśāstra by P.V.Kane (Vol. I: 1968 & V: 1977)

Hyp:Haṭhayogapradīpikā (Adyar LE., 1972)

Jy:Jyotsnā ad Hyp Hyp

Kk:Kṛtyakalpataru (Vol. 14, GOS, No. 102, 1945)

Maiup:Maitry-upaniṣad (Radhakrishnan Ed., 1953)

Me:Bhāṣya of Medhātithi ad Ms Ms

Mp:Mārkaṇḍeyapurāna (BI, Vol. 29)

Ms:Manusmṛti (Vol. 1, Bhāratīya VidyāS., No. 29, 1972)

Ph:Prapañcahr̥daya (TSS, No. 45, 1915)

Sbh:Śābarabhāṣya ad Jaiminīsūtra (Vol. V, AnSS, No. 97, 1973)

Svup:Śvetāśvatara-upaniṣad (AnSS, No. 17, 1966)

Svpsbh:Bhāṣya ad Svup Svup

- Ys:Yogasūtra of Patañjali (Madras,1952)
- Ysbh: Bhāṣya ad Ys Ys
- Ysbhvi:Vivaraṇa ad Ysbh Ys
- Ytup:Yogatattva-upaniṣad (BhattacharyaEd.,ParimalSS No.26,1987)
- Yvs:Yājñalkyasmṛti (NirṇayaEd.,1949:5thEd.)
- Banerji,S.C.[1995]: *Studies in Origin and Development of Yoga from Vedic Times, in India and Abroad, with Texts and Translations of Pātañjala Yogasūtra and Haṭhayoga-pradīpikā*, Calcutta.
- Edgerton,F. [1946]:*The Bhagavad Gītā*, HOS,Vol.38.
- Gambhīrānanda, Swāmī.[1984]: *Bhagavadgītā*, Calcutta.
[1986]: *Svetāśvatara Upaniṣad*, Calcutta
- Harimoto,Kengo [1999]: *A Critical Edition of the Pātañjalayogaśāstravivaraṇa, First Pāda, Samādhīpāda, with an Introduction*. A Dissertation in Asian and Middle Eastern Studies. Philadelphia,Univ. of Pennsylvania.
- Hume,R.E.[1931]: *The Thirteen Principal Upanishads*,[New Delhi:6thImpression: 1990]
- Leggett, T.[1992]: *Śāṅkara on the Yoga Sūtra-s:A Full Translation of the Newly Discovered Text*, Delhi.
- Olivelle,P.[1996]: *Upaniṣads* [The World Classics],Oxford.
[2000]: *Dharmasūtras:The Law Codes of Āpastamba, Gautama, Bauddhāyana, and Vasiṣṭha*,Delhi..
- Radha Burnier-Ramanasthan,A.A.[1972]:Translation of Haṭhayogapradīpikā Hyp
- Radhakrishnan, S.[1948]: *The Bhagavadgītā*.London.
[1953]: *The Principal Upaniṣads*,London.
- Roer,E.[1978]:*Īśa,Kena,Kaṭha,Praśna,Muṇḍaka,Māṇḍūkya,Taittirīya,Aitareya and Śvetāśvatara-Upaniṣads*, Delhi[NagPub.Ed.]
- Rukmani,T.S.[2001]: *Yogasūtrabhāṣyavivaraṇa of Śāṅkara*,2vols.,New Delhi.
- Thomi,Peter[1993]:*Gheraṇḍasaṃhitā (Sanskrit-deutsch)*,Wichtrach.
- Wadekar,M.L.[1996-97]:*Devalasmṛti Reconstruction and Critical Study*,2vols.,Delhi
- Wezler,A.[1983]:“Philological Observations on the So-called Pātañjalayogasūtrabhāṣyavivaraṇa (Studies in the Pātañjalayogaśāstravivaraṇa I)”, *Indo-Iranian Journal* 25,pp.17-40.
- Wezler,A.[2001]:“Letting a Text Speak:Some Remarks on the Sādhana-pāda of the Yogasūtra and the Yogabhāṣya.I.The Wording of Yogasūtra 2.22”. *Journal of Indian Philosophy*,29, pp.293-304.
- 井狩渡瀬[2002]:井狩弥介・渡瀬信之『ヤージュニャヴァルキヤ法典』東洋文庫68
- 片山[2003]:片山一良『パーリ仏典<第2期>1 長部(ディーガニカーヤ)戒蘊篇I』大蔵出版
- 金倉[1974]:金倉圓照「ヨーガタットヴァ・ウパニシャッド」『インド哲学仏教学研究

[] 春秋社

[1980-84]: 金倉圓照『シャンカラの哲学』上・下 春秋社

上村[1992]: 上村勝彦『バガヴァッド・ギター』岩波文庫

佐保田[1973]: 佐保田鶴治『ヨーガ根本経典』平河出版社

[1979]: 佐保田鶴治『ウバニシャッド』平河出版社

立川[1988]: 立川武蔵『ヨーガの哲学』講談社現代新書

辻[1980]: 辻直四郎『バガヴァッド・ギター』講談社

中村[1989]: 中村元『シャンカラの思想』岩波書店

原[1979]: 原実『古典インドの苦行』

張本[1991]: 張本研吾『Hairanyagarbhayogaśāstraについて』『印仏研』40-1,458-456頁

本多[1978]: 本多恵『ヨーガ書註解』平楽寺書店

前田[1980]: 前田専学『ヴェーダーンタの哲学』平楽寺書店

森[2003]: 森祖道『第二経 修行の成果 沙門果経』『原始仏典[第1巻]』春秋社

湯田[2000]: 湯田豊『ウバニシャッド』平文社

渡瀬[1991]: 渡瀬信之『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』中公文庫

註記

- (1) 平成15年6月30日(月)16時10分より駒澤大学中央講堂にて行われた駒澤大学仏教学会主宰の公開講演会。
- (2) 『仏教学』第37号(1995年)61-77頁。なお、この石井論文が扱う「石壁を通りぬける」と関連するヨーガ行者の自在力に関しては、本稿と同時に書き進められた拙稿「ヨーガ行者の八種の自在力」(発表誌未定)参照のこと。
- (3) 1952年に初めてその全貌を現した『ヴィヴァラナ』は、大部であり内容も充実している。さらに、著者が『ブラフマストラ註解』の作者 Śaṅkara と同名であることもあり、注目の書となった。あの Śaṅkara の真作か否かといった作者問題を含めて、多くの意欲的な研究がなされている。Wezler[1983]によって、今日では、Pātañjalayogaśāstravivarāṇa という呼称が一般的である。Trevor Leggett、T.S.Rukmani によって、既に2種類の全英訳 Leggett[1992] Rukmani[2001]も公刊されるに到っている。第1章に関しては、本邦の中村元博士が『アーガマ』誌(1979.12~1983.5)上にいち早く全和訳を発表されたし、張本研吾氏によって、新たな校訂テキスト Harimoto[1999] が作られている。
- (4) 本多[1978]144頁参照。
- (5) この箇所を、待望の『ヴィヴァラナ』の最新全英訳を梵文テキストと共に刊行した Rukmani は、なぜか、“which are the names well-known in the sacred texts.”(Rukmani[2001],i,p.367,1.19)としている。これは致命的な誤訳であろう。Leggett[1990]は“well-known from other authoritative works (śāstra).”とまざまざである。なお、「他の教学」に関しては、張本[1991]、Harimoto [1999],p.135,n.245を参

照。

- (6) Cf. Rukmani[2001], i.p.367.
- (7) 坐処とも関連すると思われる「苦行者の住」に関しては、原[1979] 179頁以降、特に、188頁註(2)参照。
- (8) この解釈は、後出(vi)の“maṇḍapa-vedi-kūpa-ruciram”(6a)「あずまや(亭)、テラス、井戸があって住み心地よく」等に、通うものがある。
- (9) 前田[1980] 75頁。
- (10) 前田[1980] 75頁。
- (11) 立川[1988] 101頁。なお、Harimoto[1999], pp.134-135は、“Haṭhayoga in the YVi?”と題して論じ、『ヴィヴァラナ』におけるハタヨーガ的なものの影響を排して、それを Patañjali のとは別の Hiranyagarbha の、知られざる「他の一つのヨーガ教学」のものとしようとする。そこでは後代の Hathayogadīpikā なる著作についても言及されるが、註245では、その作品を14世紀ころに帰している。おそらく、これは本稿で扱う Haṭhayogapradīpikā の誤記であろう。
- (12) このブラーナに関しては不明。
- (13) この用例に見られる、「ヨーガの家と種々の絵」は、冒頭で触れた石井公成氏のいわゆる「壁に描かれた絵」に通じるものがある。石井論文69頁以降参照。
- (14) 『ハタヨーガブラディーピカー』『ゲーランダサンヒター』、及びハタヨーガに関しては、立川[1988] 97-158頁参照。
- (15) Thomi[1993]所載のデーヴァナーガリーによるテキスト(p.146)には、明らかに dūra-deśe と dura-deśe となっており、単純な誤植というものではない。
- (16) Cf. Thomi[1993], pp.147-149.
- (17) この作品に関しては、金倉[1974]206-211頁参照。
- (18) 「念想(upāsana)」という概念自体、難解であるが、今は中村[1989]651頁以降に従う。
- (19) この箇所に関しては、『ヴィヴァラナ』との関連性が、既に張本[1991]456頁註(5)に指摘されている。
- (20) ここでの Śaṅkara の議論は、明らかに、Śabara の “tathā, same darśapūrṇa-māsābhyāṃ yajeta, prācīna-pravane vaiśvadevena yajeta, paurṇamāsyāṃ paurṇa-māsyā yajeta,…” (Śbh ad Ms -2-9-23:iv, pp.53-54を踏まえたものである。Vācaspati の『パーマティー』 Bhāmati の記述からもそのことが知れる。Cf. Bh.p.950, l.11…)
- (21) 金倉[1980-84]下 497-500頁参照。
- (22) これに関しては、『ヴィヴァラナ』ないし Śaṅkara とのからみで、張本[1991]が論じている。
- (23) 『クリトヤカルパタル』、Wadekar[1996-97], i.p.312共に、この箇所は、devatā-āyatanam と、中性単数主格をなしていて、文法的には、實際解説不能である。Kane は、

HDS,v,p.1431,n.2351で、Kkよりのその部分のサンスクリットテキストを引いているが、何らコメントなしに、devatā-āyatana-sūnya-āgāra...と複合語として処理している。拙訳(11)でも、実質そのように、処理している。

(24) この箇所の samupastīrṇamānaṣaṃ は解読不能である為、筆者は、samupastīrṇam ānaṣaṃ の誤記・誤植と考えたが、Wadekar も同様な修正を行っている。Cf.Wadekar [1996-97],i,p.312,l.14..

(25) Cf.Wadekar[1996-97],i,p312,ll.13-19:<2410>...

(26) なお、Banerjiは、上引(xii)の最初の下線部と、Kaneの英訳(HDS,v,p.1432)を踏まえて、以下のような訳文を与えている。Banerji訳とKane訳はほぼ同じである。解釈のポイントは、一つの複合語の支分をなす、giri-kandaraをどう解釈するか？ 両英訳は、共に「山の洞窟」としているのに対して、拙訳では「山」と「峡谷」と分けて訳してみた。これは、後に見る、(xv)を顧慮してのものである。

.... a yogin should practise meditation in any of the following places:

shrine, empty house, mountain-cave, sands of a river, forest, pure spot free from danger.

(Banerji,p.50)

(27) Cf.HDS,v,p.1431,n.2351;Bssbh ad Bs -4-28:p.430,ll.4-5.

(28) Devalaの名前を冠した『デーヴァラスムリティ』Devalasmr̥ti という著作が現存していて容易に参照も出来るが、それは、たかだか90詩節からなるもので、後代編纂されたものであると言われる。今は失われてしまった『デーヴァラスムリティ』ないし『デーヴァラダルマーストラ』Devaladharmasūtraよりのものと考えられているが、近年、種々文献からDevalaの名前と共に回収された引用が集成・分類整理されてWadekar[1996-97]が出版された。種々の意味で労作であり、今日Devalaに参究するに当たって不可欠の研究成果であろう。Devalaの哲学的局面に関しては、特にWadekar[1997]ii,pp.143-205が有益である。なお、歴史的に見て、Devalaに関しては、碩学Kaneの研究が、最も充実している。さらに、「サーンキヤ及びヨーガとダルマシャーストラの関係」を論じた箇所にも、Devalaに関説するところが多い。Cf.HDS,i,pp.279-284;v,pp.1352-1467.

(29) 坐処を考える上で重要な、この「清らかな(śuci)」という形容詞は、歴史的に見ても『シュヴェーターシュヴァタラウパニシャッド』の用例(ii)に匹敵する『マイトリーウパニシャッド』VI-30の“śucau deṣe śuciḥ sattva-sthaḥ sad-adhīyānaḥ sad-vādī sad-dhyāyī sad-yājī syād”(Maiup,p.839)「清浄な場所において、人は清浄であり、サットヴァ[純質]の中に存在し、良く学び、良く語り、良く瞑想し、良く祭るものであるべきである。」(湯田[2000]594頁)に於いては、śucau 処格[場所 deṣe 処格]と śuciḥ 主格の組み合わせで登場する。

(30) BS -1-3やBS -2-37に対する Śaṅkaraの註釈に対する Vācaspatiの復註『パーマティー』の中に、“hairanyagarbha-pātañjala-ādeḥ”(Bh,p.438,l.11) “sām̐khyā-yoga-

vyapāśrayā hiranyaagarbha-patañjali- prabhṛtayah” (Bh,p.565,II.6-7) と記される。詳細は割愛するが、張本[1991]を参照。

- (31) 目下、『ヴィヴァラナ』の作者・成立問題で、Śaṅkara 別人説の急先鋒に立つのが、Rukmani である。女史は、Rukmani[2001],i,pp.xxvii-xxviiiなどで、『ヴィヴァラナ』作者が、Ysbh ad Ys -50を註釈するに際して、Vācaspatiの所説を踏まえている」という前提の下で、その成立を Vācaspati 以降と主張している。それに対して、Harimoto[1999]p.57は、“I do do not think the reference to the terms *pūra* and *recaka*...may be considered to refer exclusively to Vācaspati’s commentary. Those terms are generic to yogins.” とした上で、むしろ、『ヴィヴァラナ』作者のその註釈の典拠を、「ヒラニヤガルバのヨーガ教学」に帰して、Rukmani の所説に根拠薄弱であるとの疑義を表明している。『クリトヤカルパタル』の引用するDevalaの所説を踏まえて、Kane は、“The words ‘recaka’, ‘pūra’ and ‘kumbhaka’ also must be, however, regarded as ancient enough.” (HDS,v,p.1439) と言い、Banerjiは、Devala が “*Recaka, Pūra* and *Kumbhaka* which constitute *Prāṇāyāma*.” (Banerji[1995],p.51) に言及、定義していると言う。この点も、『ヴィヴァラナ』と「ヒラニヤガルバのヨーガ教学」とDevala の関係を伺う上の一つの資料となるであろう。Cf.Kk,p.170;Wadekar [1996-97],i,p.311. なお、『クリトヤカルパタル』に引かれ、現れるのは、*kumbha*, *recana*,*pūraṇa* という語形である。注意を要する。
- (32) 『ヴィヴァラナ』の作者問題は未だ決着を見ていない。Śaṅkara は初めヨーガ哲学徒であったが、後にヴェーダーンタに転じて、今日 Śaṅkara の著作として知られる数々の著作を著したという、強力な仮説を提示して、Śaṅkara 同一人説の流れを生み出した P.Hacker 以降、それに異を唱える学者たち、さらに文献的にその問題に決着をつけようとする学者たちの熱狂ぶりはかなりのものがあつた。その流れは、『ヴィヴァラナ』研究の成果を集大成したものと大いに期待させた Rukmani 女史による英訳付きサンスクリット・テキスト (Rukmani[2001]) の刊行までを先取りする形で、その研究史の通観とご自身の研究成果をまとめた張本健吾氏の学位論文 Harimoto[1999]pp.1-136 “Introduction” に就くのがベストであろう。
- (33) 類似の記述が、各種法典にある。例えば、『ヤーージュニヤヴァルキヤ法典』 Yājñavalkyasmṛti -18には “*antarjānu śucau deśa upaviṣṭa udamukhaḥ / prāḡ vā brāhmaṇa tīrthena dvījo nityam upaspr̥set/18/*” (Yvs I-18:p.7) 「ドヴィジャ(上位三身分)は、膝の間に[右手を置き]、清浄な場所に北もしくは東を向いて座り、[右掌にある]ブラフマンへの通路(ティールタ)を用いて[水に]触れる(水を啜る)のを常とすべし。」(井狩渡瀬[2002] 15-16頁)とある。Devala の所説と同様、「北面ないし東面して」となっている点は重要である。
- (34) 渡瀬[1991] 50-51頁参照。
- (35) Medhātithi が言う *ācamana-vidhi* (Me ad Ms -70:p.270)、この儀礼そのものについて、さらに詳細に検討する必要があるが、本稿ではそれを断念する。

- (36) Cf. Olivelle[2000], p.123.
- (37) 張本[1991] 457頁参照。
- (38) この3シュローカのうち、第1のものが、Mp XLI-21:p.239、第2 & 第3が、Mp XXXIX-48b ~ 50a:p.231に相当する。
- (39) Cf. HDS, v, p.1431.
- (40) 本稿執筆の過程で、Harimoto[1999]を拝読する機会を持った。『ヴィヴァラナ』の作者問題に関心を持ち、A. Wezler や先年物故された W. Halbfass の論文等が出る度に、貪るように読みあさってきた筆者ではあったが、うかつにも、それを今日まで通読することを怠ってきたのである。その Introduction において展開されている氏の精緻な論述に啓発されるところが多々あった。Harimoto[1999], p.135, n. 245が言う張本[1991]の増広版とも言うべき英文の論攷が既に発表されているかは、残念ながら不明である。Cf. Wezler[2001], p.302, n.54.
- (41) 森氏は、アツカターに基づく訳注を付しているが、「洞窟」に関しては、「giri-gūha<マ>.二つの山の間にある場所がトンネルのようにになっている大きな裂目」(森[2003] 604頁)とし、「面前に注意力を集中して」に対しては、「業処(禅定を実習するとき、心を集中させる対象物)に向けて注意力を専注して、という意味」としている。片山訳にも、類似の訳注が付されているが、特に「全面に念を現前させ」に対する補注が有益である。片山[2003] 213頁、416頁参照。
- (42) 『ブラバンチャフリダヤ』に関しては、拙稿「Prapañcaḥṛdaya 試論 一匿名作品の歴史的位置づけ」『駒大仏教学部論集』44号((昭61年) 398-377頁参照。